

佳作

初めての国立科学博物館

東京都 お茶の水女子大学附属中学校一年 桑原 佑月

私は外に出るのが嫌いだ。ましてや休みの一日目なんて絶対に外に出たくない。でも母に「博物館や科学館に行く」という課題があると言ったら、

「じゃあ、早く終わらせちゃいませよ。」
と言われ、そそくさと準備を始めてしまった。「行きたくない」なんて言える訳もなく、いやいや外に連れ出された。博物館に向かう途中の道でも、電車の中でも、私はずっと暗い気持ちで、家に帰ったらやることを考えていた。

だが、いざ国立博物館の人間史コーナーに入ると、そこには時代ごとの人の武器の違いや、頭蓋骨の進化の標本が置かれていた。そこまでずっと時計ばかり見ていた私だが、進化や生物は好きなので少しずつ化石や説明を見るようになっていた。続いて生物のコーナーに入っていくと、そこには私をより惹きつけるものがたくさんあった。「うわっ、大きい」

思い返してみれば、私は博物館の中で一度も休んでいない。妹と父は博物館の滞在時間の三分の一はベンチで座っていたのに。

きっかけは学校の課題で訪れた博物館だったが、私が思っていた以上に素晴らしい場所だった。展示物と、それに合わせたちょうどいい情報量。私は家が好きだが、こんなに得るものが多いなら、たまには外に出てもいいと思えるようになった。

「なにこれ、ぶにぶにしてそう」「すごい。きれい」。私が一番見ていたのは海藻や虫、菌類など、生物のモデルコーナー。いつも身近にありながら見ることでできない世界が、モデルとはいえ、近くで見ることができ、その美しさに感動した。モデル一つ一つをじっくり見て、その説明を読んで。その全てが私には新鮮で興味深く、本当に楽しく、どんどん引き込まれていった。なぜ私はスケッチブックも、メガネも持ってこなかったのだろうか。もう私の頭には、あんなに出たくなかった家のことなど浮かんでいなかった。ただじっと、そこにある美しいものを見つめていた。父に、

「いつまで見ているんだ、早く行くよ。」
と言われなければ、きっと、もっともって見ていたと思う。

少し行った先で私の目に飛び込んできたのは小鳥の剥製。私は鳥が好きだ。かつて、たくさんのお鑑の中から「一つだけ選んでいいよ」と言われて、鳥のお鑑を選んだくらい。その剥製は小さくて上品で、本では分からない、実際の大きさを感じられた。自分が好きなものを近くで、それもたくさん種類を一度に見ることができ、とても充実した時間を過ごすことができた。